

| | | | |
|---------|-------------------------|--------|-------|
| 氏名（本籍） | 藤本(仲本) 美央（東京都） | | |
| 学位の種類 | 博士（学術） | | |
| 学位記番号 | 博甲第 7068 号 | | |
| 学位授与年月 | 平成26年 3月25日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | | |
| 審査研究科 | 人間総合科学研究科 | | |
| 学位論文題目 | 読みあう活動に関する保育者研修プログラムの開発 | | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 教育学博士 | 徳田克己 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 博士（学術） | 水野智美 |
| 副査 | 筑波大学准教授 | 教育学修士 | 飯田浩之 |
| 副査 | 和洋女子大学教授 | 医学博士 | 鈴木みゆき |

論文の要旨

（目的）

保育現場において絵本や児童文学を活用した保育実践は、日常的なものであり、保育所保育指針や幼稚園教育要領の保育内容においても意義のある活動とされている。一般的には、保育現場に限らず家庭などにおいても「読み聞かせ」という言葉などで表現され、先行研究などから子どもの育ちにおいて必要不可欠な活動という認識があることも明確になっている。これまでの保育現場における読み聞かせ活動の狭義の捉え方と先行研究の流れから、保育現場で絵本の読み聞かせ活動の中でも子どもと保育者または子ども同士が共に絵本を読みあうなかで、互いの相互作用が生まれ、その相互作用によって発展した別の活動も生み出している活動については「読みあう活動」として捉え直した上で、保育現場で子どもと保育者、子ども同士が絵本を「読みあう活動」に関する実態調査・研究が必要であると考え。そこで、本研究では保育現場における絵本を読む活動のうち、子どもの育ちに効果的であるとされている子どもと保育者または子ども同士が絵本を読みあう活動を保育者に研修していくプログラムの開発に関する実証的研究を行うことを目的とした。

（結果）

本論文は8章から構成される。まず、第1章では本研究における問題の所在と目的を明確にするため、国内外における読みあう活動の現状と研究動向や保育者研修の現状と研究動向を概観した。

第2章では保育者に対して保育現場の読む活動における保育者のねらいや保育方法と読みあう活動の保育技術・能力に関する関連要因を検討するための質問紙調査を行った。この結果、保育者は読みあう活動において、絵本および読みあう活動の知識を深め、子どもに関する理解と支援を行い、

日常から保育者としての資質の向上や教養を身につけ、読みあう活動に関するねらいや保育計画・環境設定をしていることが明らかになった。

第3章では絵本や読みあう活動の研修に対する保育者のニーズを検討するための質問紙調査を行った。このような基礎研究に基づいて、第4章では読みあう活動に関する保育者研修プログラムを開発するために、第1章と第2章から得られた知見と読みあう活動を実践している保育園の調査をもとに、読みあう活動に関する保育者研修プログラム第1版を読みあう活動の子ども理解と保育にねらいや計画を立てることを中心とした研修と読みあう活動の保育技術を中心とした研修の2パターンで作成し、保育者71名に対して実施した。

第5章では保育者研修プログラム第1版参加者に記入してもらった研修後のふり返しシートを分析し、読みあう活動に関する保育者研修プログラム第1版の評価を行った。この結果、2パターンどちらとも研修の理解度や満足度は高かったが、特に読みあう活動の保育技術を中心としたグループ学習の多い研修内容の研修に対するニーズが高かった。さらに、参加者から得られた回答より、第1版第の改善点を明らかにして、第2版の作成を行った。

第6章では、保育者79名に対して、第5章で作成した読みあう活動の保育者研修プログラム第2版の研修を実施し、振り返りシートで評価をしてもらった結果を分析した。この結果から、以下4つの改善点があげられた。

- (1)研修の進行における時間配分の改善
- (2)研修の内容に関する説明性を高める
- (3)研修環境への配慮
- (4)絵本の知識の講習や具体的な保育技術の実演講習の必要性

第7章では第6章で作成した読みあう活動に関する保育者研修プログラム第2を保育現場に勤める保育者79名へ実施し、筆者が作成した読みあう活動のねらいや保育方法の質問紙を用いて研修の効果を分析することによって、本プログラムの適正性の検証研究を行った。

第8章では、総括として研究のまとめ、総合的考察、研究の限界、今後の課題をまとめた。

(考察)

読みあう活動に関する研修は研修としては特に必要とされているという言及までには至らないものの研修へのニーズとして決して低いものではなく、日頃必要としている研修の一つであると捉えることができる。また、30歳未満の経験の浅い保育者に特に高いニーズがあると言える。また、絵本や保育現場での読みあう活動に関する研修に必要である条件としては、主な研修受講者が保育者経験10年未満の対象であることを想定し、絵本の紹介や選び方などの基礎知識を含めながら、具体的な保育実践に関する知識や方法を教授できるプログラムが必要である。実際に、読みあう活動に関する研修プログラムを作成する際にも、読みあう活動の保育技術中心型のプログラムが必要とされており、本研究にて作成したプログラムを実施した結果から、保育者にとって効果的な研修であることが実証され、今後も保育現場において研修を実施して、保育の質を高めることが重要である。しかし、この研修も研修直後には明らかな効果が得られるが、本研究の効果の検証期間1ヶ月後までと短期間であったことから研修効果が持続されていることの検証までには至っていない。また、研修直後の読みあう活動に関する保育のねらいや保育方法への認識を深まっていたことを考

えると、研修は1回だけの単発での実施に留まらず、継続した知識・技術の向上を図れる研修の実施とそのプログラムの開発を行い、今後もその効果を検証していく必要があると言える。

審査の結果の要旨

(批評)

保育者の保育の質を高め、子どもたちの育ちを保障していくために、絵本などを読みあう活動の保育者研修プログラムの開発に着目した研究は重要であると言える。先行研究では、保育現場における絵本などを読みあう活動の数多くの実践報告や1～2事例の保育実践の分析に関する研究は行われているが、絵本を読みあう活動の保育者研修プログラムの開発にも至っていなかった。

本研究では、これまでの研究にはなかった一般的な保育現場において必要な絵本などを読みあう活動の保育者のねらいや保育技術や研修に対する保育者のニーズを明確にした上で、研修プログラムの開発をしている。また実際に保育者に対してその研修プログラムを実施し、研修参加者による評価を明らかにしたことで、自らが開発した研修プログラムの改善点を示している。これらの結果から読みあう活動に関する保育者研修プログラムの開発をするため複合的に検討し、さらに、参加者に対する質問紙調査の結果から研修効果を実証しており、そのオリジナリティは高く評価できる。

以上、研究の意義、オリジナリティ、成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成26年1月6日、博士(学術)学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと最終試験を行い、論文について説明をもとめ、関連事項について質疑応答を行った結果、審査委員全員によって合格と判定された。

上記の論文審査の結果にもとづき、著者は博士(学術)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。